

有識者・著名人によるODA事業現地視察

ガーナ

一般財団法人CSOネットワーク 黒田かをりさん

ラオス・カンボジア

女優 遠藤久美子さん

JICAの評価業務やODA事業の効果、国際協力の大切さについて、広く国民にわかりやすく発信するため、2004年度より有識者・著名人によるODA現地視察のレポートを掲載しています。

2010年度は、一般財団法人CSOネットワークの黒田かをりさんにガーナで、女優の遠藤久美子さんにラオス・カンボジアで(P.14)、ODA事業を視察していただきました。

※全文版はJICAウェブサイトに掲載しています。

http://www.jica.go.jp/activities/evaluation/monitoring_02.html（黒田さん） <http://www.jica.go.jp/activities/evaluation/monitoring.html>（遠藤さん）

日本に比較優位のある 援助アプローチの選択を 黒田かをりさん



一般財団法人CSOネットワーク事務局長・理事。民間企業勤務の後、コロンビア大学ビジネススクール日本経済経営研究所、米国民間非営利組織アジア財団を経て、2004年より現職。ISO26000（社会的責任規格）策定の日本のNGOエキスパート、「新しい公共」推進会議委員などを務める。

ガーナは、政治的・社会的に安定を保ち、2020年までに中所得国になる目標を掲げ着実に成長を遂げており、西アフリカにおいて主導的役割を果たしている。その一方で、脆弱な経済構造や貧困等の開発課題を抱えている。ガーナ政府は、「民間セクター振興」「人的資源開発」「ガバナンス」を開発重点分野に置き、貧困削減と経済成長に取り組んでいる。沖合油田の掘削も進み、2010年より商業生産が開始された。民間投資も急増するなど、民間セクターの成長が著しい。

日本は、保健・医療分野をはじめ、農業、教育分野の人材育成、経済インフラ整備などを長く支援してきた。現在、ガーナ政府の開発重点分野に即した「経済成長を通じた貧困削減」のために、「地方農村部の活性化」「産業育成」の2つを重点開発課題として絞り込み、これらの課題に対処する観点から「行政能力の向上・制度整備」の支援にも取り組んでいる。2010年のミルズ大統領来日時に、日本政府は円借款の再開、研修員受け入れ追加等の支援強化、日本企業のガーナ投資の推進を表明した。

一方、ガーナでは援助協調の進展が目覚ましく、セクター・ワイド・アプローチ※1が定着しているほか、一般



幹線道路セクター投資計画で整備された道路。クマシ〜ケープコースト間で最も交通量が多い

財政支援※2もガーナの援助受け取り量の3割を占める。中国、韓国、インドなど大規模インフラ支援を行う新興の援助供与国も台頭するなかで、日本はより比較優位のある援助アプローチを選択する必要性に迫られているのではない。今回の視察で、この問いかけへの答えを解く鍵を得た。

現場とのつながりを大切にした 地に足の着いた技術協力

メイズに次ぐ第二の穀物であり、国内消費の6〜7割を輸入に頼るコメを国内で増産することは、食糧安全保障、外貨節約、小規模稲作農家の生計向上のためにも重要である。JICAは、天水稲作の優良技術の確立と稲作農家の営農支援システム整備の手法をモデルとして普及させる「天水稲作持続的開発プロジェクト」を行っている。

20年以上も各国の現場で経験を積んできた大原克之専門家がチーフアドバイザーを務め、稲作のノウハウの移転にとどまらず、農家グループによる自主的な取り組みの支援、販路の拡大、普及方法の確立など日本が得意とするきめ細かい活動を行っていた。地域ごとに伝統的な長の下に

視察事業(2011年2月28日~3月4日)

技術協力	天水稲作持続的開発プロジェクト 野口記念医学研究所 技術教育制度化支援プロジェクト
円借款	幹線道路セクター投資計画
無償資金協力	国道8号線改修計画 幹線道路改修計画
ボランティア事業	青年海外協力隊、シニア海外ボランティア (教育、自動車整備等)

※1 開発途上国が援助国、国際ドナーとともにセクターの開発計画を策定し、この計画に沿って開発や援助を進める方式

※2 政府全体の予算に資金を直接供与する援助方式

秩序正しい社会が構成されているガーナには、農民や住民の参加を得ながら進める技術協力のやり方が向いているようだ。

モデルサイトで会った稲作普及員は、「昨年はグループ作業に若干の問題があったがそれを克服し、来年はさらに水田を広げ多くの農家に関わってもらう予定だ」と話していた。先にモデルありきの発想ではなく、「農民と共に試行錯誤の事例を積み上げていく必要がある」という大原専門家の言葉が印象的であった。



大原克之専門家(中央)から天水稲作持続的開発プロジェクトについて説明を受ける筆者(右)



ケープコースト技術学校自動車整備科のきちんと整頓された実習場。トヨタガーナの認定取得に成功した

地元住民と共に進める経済インフラ整備

首都アクラ、輸出港タコラディ、クマシの3地点を結ぶ交通回路のうち、クマシより南下する国道8号線のアシンブラソ〜ベクワイ間約60kmの改修工事が無償資金協力によって行われていた。コンサルタント業務を株式会社アンジェロセック、施工を徳倉建設株式会社と日本企業が請け負い、西アフリカでの経験豊富なポルトガルの建設会社と共に現地の労働者を雇用し、資材も現地調達するという地元根ざした形で事業を実施していた。

徳倉建設は工事の際に地域貢献にも取り組むという社是で、改修事業に従事する労働者を対象にしたエイズ教育やマラリアやコレラなど感染症に関する啓発活動を、現地NGOに派遣されている青年海外協力隊員の協力を得て実施していた。同社の取り組みは、日本企業、現地コミュニティ、JICAの連携の好事例である。

包括的な取り組みと

民間セクター連携に貢献する協力隊

ガーナには青年海外協力隊員とシニア海外ボランティアあわせて約90名が派遣されており、日本料理の指導から、理数科教員、現地の障害者支援団体で働くなど多岐にわたる活動をしている。JICAボランティアには特に注目する点が2つあった。

ひとつは、JICAが包括的な取り組みを進めるに際に重要な存在となっているということである。アッパーウェスト州で実施された地域保健強化プロジェクトでは、技術協力と無償資金協力に加え、青年海外協力隊の草の根の活動との連携によって貧困地域の住民の基礎的保健サービスへのアクセス向上を目指す包括的な取り組みが行われていた。同地域では次のフェーズとして母子保健強化プログラムを展開する。

もうひとつは民間セクターとの橋渡しの役割である。ケープコースト技術学校で自動車整備について教える井上

比呂司隊員は、日本でトラックやバスの整備や販売を行う大手企業に15年近く勤めた経験・知見をすべて同校に引き込むように活動していた。作業場の整理整頓、クライアントが訪れる受付の美化を進めることで職場環境の改善と同時に同校学生のモチベーションを高めていた。また、派遣期間を延長し、同校に日本企業から自動車整備の契約を取りつける交渉を進めていた(その後、2011年7月にトヨタガーナの認定取得に成功)。日本企業のなかにアフリカなどの開発途上国で貧困層を対象としたビジネス(BOPビジネス)に関心をもつところが増えており、その際に必要とされるのが現地に明るい人材である。今後、青年海外協力隊経験者が活躍する場面は増えていくだろう。

「正の連鎖」を作れることがJICAの比較優位

日本のODAが抱える最大のチャレンジは、毎年目減りする予算のなかでより効果の高い事業を求められることであろう。

日本のODAの強みは、無償資金協力から技術協力や研究協力への発展、その過程での人づくり、という連携だといわれている。他の援助供与国と比べてやや地味な感も否めないが、東日本大震災後に、ガーナを含む160以上の国・地域が日本に支援の手を差し伸べてくれたことは、長年にわたり社会経済の開発へ貢献した日本と日本人への信頼を証明しているのではないだろうか。今回の視察で特に印象に残ったのは、どの案件も現地の人とのつながりや地域を大事にしているということだった。長い時間をかけて人とながら、成果を生み出し、さらに信頼を深めるという「正の連鎖」を作れることこそ、得難いJICA事業の比較優位性だと思う。これを強みと認識し、新しい環境やニーズに対応していく際のベースにしていくことが必要である。

近年、開発課題解決に向けて多様なステークホルダーの連携が重要視されている。現地の政府、地域組織や住民はもちろんのこと、JICAと企業との新しい関係や、NGO・企業との対等な連携関係の構築に向けたさまざまな取り組みにもっと力を入れていただきたい。あらゆるセクターにおいてこれまでつきあいのなかった「非伝統的なアクター」との連携が求められる場面が増えている。より広範なステークホルダーとの連携にも積極的な取り組みをされることを強く望みたい。

その国の人たちが 自立して歩んでいけるように

ラオス・カンボジア視察 女優 遠藤久美子さん

1978年、東京都出身。95年、デビュー。ドラマ「てっぺん」「金田一少年の事件簿」他多数出演。2005年9月にTV番組「アフリカの大地に笑顔を～ボリオ撲滅の日を目指して～」でニジェールの青年海外協力隊員(看護師)取材。

2011年2月20日～26日の日程で、女優の遠藤久美子さんにラオス・カンボジアのODA事業を視察していただきました。視察後、JICA評価部がインタビューしました。



無償資金協力が実施されたラオスのバオ村小学校を訪れた遠藤久美子さん

——今回の視察で特に印象に残ったことを教えてください。

日本とラオス、カンボジアという国が、こんなに国際交流でつながっているのだ、ということを感じました。また、その土地で奮闘し、日々悩み、葛藤し、何かを築き上げようとしている日本人がいたことです。

——JICAの事業のやり方、開発途上国の問題に対するためのアプローチは適切だと思いますか。

「なぜこれがこの国に必要なのか」といったことを判断するのは非常に難しいと思います。ただ、これまでは生活手段などに選択肢がなかった国も、プロジェクトの積み重ねで、一人ひとりの選択肢が増えていき、自分で考え自立していくことができる、ということを感じられたので、適切だと思いました。

——JICAの事業が終わっても効果は長続きしそうですか。

建物などを造るだけではなく、その後のことを考えて、プロジェクトの周りの人々に知識や技術を教えていました。カンボジアの水道公社では、人々が自分たちで施設を管理できるようになったところまで見届けてから、支援の手を離していました。このような努力を続けることで、将来はその人たちが自立して歩んでいけるのではないかと思います。

モノと人材を組み合わせた支援は必要だと思います。村の飲料水、ごみ、病院の衛生などそこにある問題を解決していく方法を、JICAの専門家や青年海外協力隊員が、人々に熱意をもって手取り足取り教えていたことに感動しました。開発途上国をきちんとサポートする、教える、伝える、

パートナーシップを結ぶ、それが先進国の役目のひとつでは、と思います。

——今回の視察を通じ、日本国内にどのようなことを伝えたいですか。

「一つひとつの積み重ねで、日本のODAを通じてさまざまなことが形となっていた」ことを伝えたい。国民の税金を使ってどのような事業が具体的にされているのかを知る機会は少ないですが、今回、日本の支援が重要視され、必要とされていることがわかりました。私たちも小さなことからもっと参加できるのではないかともしました。

そして、教育の重要性です。これから開発途上国に外国企業の進出が増え経済が発展していくときも、その国の発展の方向性は、最終的にはその国の国民が決めていかなくてはならないので、一人ひとりにそれを判断できる知識が必要になってくると

思います。今回、教育分野のさまざまな事業を見て、10年、20年先、ときには100年先を考えたときに、教育分野の支援は本当に重要だと改めて実感しました。

視察事業(2011年2月20日～26日)

ラオス	技術協力	南部3県におけるコミュニティ・イニシアティブによる初等教育改善プロジェクト サバナケット県及びサラワン県における一村一品プロジェクト ラオス日本人材開発センタープロジェクト
	円借款	ナムグム水力発電事業
	無償資金協力	南部3県学校環境改善計画 バクセー橋建設計画
	ボランティア事業	青年海外協力隊(教育、看護)
カンボジア	草の根技術協力	ラオスにおける車椅子サービスの質の向上及び現地への維持運営移管
	技術協力	水道事業人材育成プロジェクト
	無償資金協力	ブンベン市上水道整備計画 ブンプレック浄水場拡張計画 コンボンチャム州病院改善計画 コンボンチャム州メモット郡村落飲料水供給計画 メコン架橋建設計画
	ボランティア事業	青年海外協力隊(教育、臨床技術)